

【第8回】

日本生理学会 次の100年に向けての第1歩～第101回大会長として～

産業医科大学 学長
上田 陽一

日本生理学会第100回記念大会(2023年3月14～16日, 京都国際会館)が伊佐 正(京都大学大学院医学研究科・教授)大会長のもと100回記念に相応しく盛大に開催されました。本大会テーマの「恒常性と持続可能性～生理学の次なる100年に向けて～」(Homeostasis for sustainability—Toward the next century of physiological sciences—)にそって日本生理学会のこれまでの100年とこれからについて充実したプログラムと特別企画・展示が, 市民公開講座では「100年後の人類は?」というテーマで討論が行われ, 当然のことながら“100年”がキーワードとなりました。

“生理学の次なる100年”のいわば第1歩となる第101回大会を大会自体が初めての北九州の地にて開催させていただけることを大変光栄に存じます。第101回大会テーマは「生理学のこれから～生命の多様性と調和」(New Horizon in Physiology—Diversity and Harmony in Life—)と掲げさせていただきました。このテーマには, 多様な生命体・分子から社会行動・環境との関わりをも研究対象とする生理学の魅力語り合い, そして生命体が織りなす美しい調和に感嘆しながら, 第101回大会が“これからの生理学”を考える機会・場になるようにとの願いを込めました。

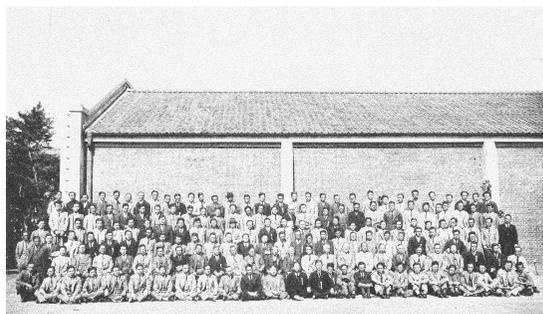
日本生理学会の第1回大会(1922年7月10～11日, 東京大学)は, 永井 潜先生, 橋田邦彦先生のもとで開催されました。この東京大学生理学研究室のご出身である暉峻義等(てるおか ぎとう)先生(1889～1966年)により労働科学研究所(倉敷)にて第15回大会(1936年10月13～15日)が開催されています(写真)。「労働科学」の創設者として知られる暉峻義等先生のお名前を存じ上げてはいましたが, 山田誠二先生(京都府立医科大学医学部ご卒業で産業医科大学産業生態科学研究所を経てパナソニック健康管理センター長を歴任)にお教えいただき, 大学関係者以外で唯一日本生理学会大会を主催されたとのことに驚きました。また, 暉峻先生はゲッチンゲン大学図書館所蔵のウィリアム・ハーヴェイ(1578～1657年)の原著を日本に持ち帰り, 翻訳しました(「血液循環の原理」岩波文庫1936年)。

第101回大会では大会長企画として「日本の労

働科学の曙と歩み—労働生理・労働衛生の原点—」というテーマで丸中良典先生(京都工場保健会), 山田誠二先生(山田誠二産業保健センター), 酒井一博先生(労働科学研究所)にご登壇いただきます。

産業医科大学は1978年に旧労働省の支援を受けて「産業医学の振興と優れた産業医の養成, 質の向上」を目的・使命として北九州市に設立されました。初代学長の土屋健三郎先生は, “1. 産業医科大学は人間愛に徹し生涯にわたって哲学する医師・医療人を養成し, 2. 産業環境を中心とする環境科学とライフサイエンスとの融合発展に努力を払い, 3. 経済学をも含む新しい生態学を発展せしめ, 4. 産業化社会における産業医学の確立のみでなく, 地域医療との有機的な結合をはかり, もって二十一世紀の医学分野における先駆者として, 人類のより良い生存をかちとるための新しい福祉社会を樹立することを建学の使命とする。”と述べられました。この建学の使命は, 私たち卒業生の精神的支柱として今も受け継がれています。生理学の“これまでとこれから”を考える上で, 生理学の立ち位置と重なるところがあると考えます。

第101回大会を北九州の地にて開催させていただけることに感謝しつつ, 皆様とお会いできますことを心待ちにしています。どうぞご参加のほどよろしくお願い申し上げます。



第15回日本生理学会大会(日本生理学教室史上巻掲載写真より引用)